Giornale Tsukushi

つくしジャーナル　第９号

第９号　令和６年９月１０日発行

社会福祉法人 和歌山つくし会

本　部　和歌山県和歌山市吉礼字八ツ井486番地の１
TEL：073-488-7470
FAX：073-478-1900

事務局　和歌山県岩出市中迫665
TEL：0736-69-1772
FAX：0736-69-5251

特集　『和歌山つくし会の新たなる仲間と共に！』

つくしっ子レポート！

「DWATに参加して」　つくし医療福祉センターPT　小山有佳乃

目　次

１．つくしっ子レポート！「DWAT に参加して」

小山　有佳乃　つくし医療・福祉センター　理学療法士

２．新任のご挨拶　西上　邦雄　社会福祉法人 和歌山つくし会　理事・顧問

つくしの里　こども園　石倉　芳美　つくしの里こども園　園長

つくし医療・福祉センター

「看護主任を拝命して」　中西　敏行　つくし医療・福祉センター　看護主任
山田　優子　つくし医療・福祉センター　看護主任
「育成主任を拝命して」　尾上　真一　つくし医療・福祉センター　育成主任
「ご挨拶」　森井　海貴　つくし医療・福祉センター　理学療法士

つくし幼保園

「憧れの保育教諭」　庄門　梓　つくし幼保園　保育教諭
「憧れの職業」　辻　璃子　つくし幼保園　保育教諭

和歌山乳児院

「無償の愛を伝えていく」　吉田　裕加里　和歌山乳児院　保育士
「ご挨拶」　鍛冶　美幸　和歌山乳児院　保育士
的場　公美　和歌山乳児院　保育士

里親支援センター「なでしこ」

「何もかもが！初めて！！」　川口　由佳　里親支援センター「なでしこ」 主任相談支援員
「ご挨拶」　生駒　慎一　里親支援センター「なでしこ」 臨床心理士

３．つくしっ子連載

連載第１回　里親支援センター「なでしこ」
第２種社会福祉事業　里親支援センターへの道のり

森下　宣明　社会福祉法人 和歌山つくし会　常務理事

連載第６回　「イタリアで見つけた共生社会のヒント」

川野　琢也　つくし医療・福祉センター　リハビリテーション課　課長

４．つくしっ子ニュース！！

広瀬幼保園　満開の桜の中、広瀬幼保園に 22 人の新しいおともだち！

菫組　土筆１組　土筆０組

つくし幼保園　「おさかな教室」開催　土橋　仁美　つくし幼保園　保育教諭

つくしの里こども園ギャラリー
シャボン玉　こいのぼり　避難訓練　バンビーニ広場　園外保育

５．編集後記

つくしっ子レポート！

「ＤＷＡＴに参加して」

つくし医療・福祉センター　理学療法士
小　山　有佳乃

令和６年能登半島地震の被災者の方の言葉などが出てきます。この記事で私が伝えたいことは終わりから２段落目に書いていますので、読んでいてしんどくなる方はそこだけでも読んでいただけると幸いです。

２０２４年１月１日１６時１０分、マグニチュード７.６、最大震度は石川県輪島市門前町走出と羽咋郡志賀町香能で震度７を観測した、令和６年能登半島地震が発生しました。消防庁災害対策本部が５月２１日に更新した情報によると、人的被害は死者２４５名、行方不明者３名、負傷者1,３１３名、住家被害は全壊８,５７１棟、半壊２０,４０２棟、床上・床下浸水２５棟、一部破損94,558棟と記されていました。

私は２０２４年３月２４日から２９日まで、和歌山DWATの一員として１.５次避難所に指定されている、いしかわ総合スポーツセンターへ派遣されました。DWATとは、「災害派遣福祉チーム（Disaster Welfare Assistance Team）」のことで、大規模災害の発生時に避難所などにおいて、高齢者、障害児・者、妊産婦、乳幼児など、特別の配慮を必要とする方（以下、要配慮者）の支援を行う福祉の専門職などで構成されるチームです。２０１１年３月１１日に発生した東日本大震災において、一般避難所で災害時要配慮者を中心とした災害関連死が大きな問題となり、必要性があげられた専門職チームの一つでもあります。災害派遣でよく耳にするDMATは「災害派遣医療チーム（Disaster Medical Assistance Team）」なのですが、DMATが「大規模な災害やけが人などが多く発生した事故現場などで医療活動を行うこと」を目的にしているのに対し、DWATは「避難所生活により要配慮者が必要なサービスやケアが提供されないためにおこる心と体の状態悪化（二次被害）を防ぐこと」を目的としています。そして、私の派遣された１.５次避難所は、要配慮者とその同伴者を対象とし、災害発生直後に開設された１次避難所などから、自宅の復旧や仮設住宅、２次避難所（ホテルや施設）などへの入居までの間、被災者の生活環境を確保するために設けられる施設です。

派遣された、いしかわ総合スポーツセンターには、約１６０名が避難されていました。震災発生から３か月が経過しようとしていたこともあり、多くの避難者は２次避難所や仮設住宅への申し込みが済んで、入居許可が出るまでの待機中という状況でした。活動では、次の避難先への申し込みの促しや、待機中の方へ進捗状況の確認をしつつ、避難所生活や今後の生活について悩みごとがないかを聞き取ること、震災によるメンタルケアをすること等が求められました。６日間の派遣期間の中で、初日と最終日は移動日となるため、実際の活動日数は４日間です。避難者の

立場からすれば、外部から代わる代わる人が訪ねてきて、話を聞かせてほしいと言いますが、その人は数日するといなくなって、また次の人が訪ねてきます。震災を経験し、自宅や家族、友人、仕事、趣味…いろんな「日常」を失った状態で、他所から来た人に「気軽に、なんでも相談してくださいね」と言われて、十分に相談できる人はどれくらいいるのでしょうか。実際、訪れたときに心無い言葉をかけられることもありましたが、そのような対応になってしまうのも無理はないと感じました。有難くも、訪れているうちに、徐々に悩みを打ち明けてくれる方が多かったのですが、それは同時に震災の経験を共有することでもありました。「もともとは畑仕事を楽しみに生活をしていたけど、避難生活で体力が落ちてもう土いじりはできない」、「たった一人の家族を失って一人ぼっちになってしまった」、「命は助かったけど仮設住宅のある所は知り合いがいない」、「避難所生活で親の介護度が上がってしまい、一緒に仮設住宅へ行きたいけど施設に入ってもらうしかない」。その一つひとつの話が、始めに記した人的被害や住家被害のように目に見える被害ではなく、人の目には見えない被害の大きさを物語っているように感じました。そしてだれもが、「まさか正月にくるなんて…」と口をそろえて言うのです。

皆さんの多くは「地震」を経験したことがあると思います。では、「災害」を経験したことある人はどれくらいいるでしょうか。近畿地方で有名な災害として１９９５年の阪神・淡路大震災があげられます。ほかにも和歌山県では２０１１年の台風第１２号による大雨災害が記憶に新しいのではないでしょうか。そして、近年、南海トラフ地震の話題を耳にすることも多くなりました。日々、生活を送っていると、「なにも起きない当たり前の日常」がこの先ずっと続くものだと錯覚してしまい、有事の際の準備が疎かになりやすいです。しかし、有事が起きていない「平時」にこそ、備えをしておく必要があると、DWATの活動を通じて強く感じました。ぜひ年に１度でもいいので、自分の、そして家族の災害時の備えについて、考えたり、見直したりしてみませんか。取り掛かりやすいのは、物品の確保だと思いますが、それ以外にも避難場所の確認、避難後の合流方法の確認、連絡手段の確認等、「備え」と一言にいっても様々な備えがあります。そして、私たちの働く職場での避難訓練も大切な「備え」の一つだと思います。つくし医療・福祉センターで行われる避難訓練の多くは療育棟内で完結していると聞きました。それも大切ですが、有事の際、座位保持装置に乗っている、またはベッドで寝ている入所者様をどのように避難させるのか、「実際に」行ったことはありますか。屋内のエレベーターや階段が使えなくなった時、どのように避難しますか。日勤帯に発生すればまだ人手がありますが、夜勤帯ではどうしますか。私の所属するリハビリテーション課においても、机上で話し合いをすることはあっても、「実際に」入所・外来の利用者様と共に避難訓練をしたことは、少なくとも私が入職して５年間ありませんでした。災害において、「絶対」は存在しません。想定よりも人が足りな

いかもしれない、物品が足りないかもしれない、ライフラインが途絶えるかもしれない、そんなことが非常時には当たり前に起こるのです。だからこそ、いろんなシチュエーションを踏まえた避難訓練をして「備え」ておく。読み合わせや職員だけの避難訓練だけでなく、「実際に」災害を想定して経験しておく。経験に勝るものはないのです。そういった意識を職員一人ひとりが持つことが大切だと思うのと同時に、それを実現できるような運営側のサポートも必要だと感じました。

最後になりましたが、このたびの令和６年能登半島地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。被害を受けられた皆様が１日でも早く平穏な生活に戻られますことを心よりお祈り申し上げます。

新　任　の　ご　挨　拶

社会福祉法人　和歌山つくし会　理事・顧問

西　上　邦　雄

初めまして、４月からつくし会本部でお世話になっています西上邦雄と申します。

令和２年に理事を拝命し、以来４年間理事としてつくし会の運営の一端に関わらせていただいてきました。

また、これまで県の職員として、主に行政の立場から様々な仕事をしてきました。県職員を退職後には、公立大学法人和歌山県立医科大学、老人保健施設、町職員と、より住民の皆様に近い医療、福祉、行政の現場で働いてきました。

この間、いろいろな仕事をしてきた中、福祉や医療、又子どもに関わることで、いくつか印象に残っていることを自己紹介も兼ねてお話ししますと、財政課で民生部の予算編成を担当した時に、和歌山県福祉事業団の施設の改築に向けた施設見学に行ったことがありました。当時の施設は老朽化もさることながら、前時代的な形態（窓に鉄格子、大きな窓がない、窓のない部屋も）に、まるで一昔前の刑務所の様な施設に驚いたこと、又まだ措置費の時代でしたが、小規模作業所への県単独の補助制度を担当課の班長と作り上げたこと、大きい金額ではなかったのですが、今まで無かったところへ初めて県費で支援の風穴を開けたことが思い出に残っています。県での最後の仕事になりました福祉保健部長時には、日高地方には看護師の養成施設が無いために看護師が不足し、その確保に苦労しているから、是非設置を検討して欲しいという要望を受け、県で設置し地元の市町村等が運営を行うという形態で地元の同意を得て設置を認めてもらったことが印象に残っています。

和医大へは、現役の時に次長、退職後に副理事長と２回行きましたが、次長の時に、時代的には大学の法人化の直後でしたが、時の病院長と「スターバックス」を病院内に誘致したこと、これは患者や来客者へのサービスの向上が大きな目標でしたが、予想外の収入に繋がったことやドクターをはじめ２４時間働いている看護師等の職員の皆さんにも大好評だったことが記憶に残っています。これも法人化があったからこそ、そういう発想が通り実現できたのだと思います。

副理事長の時には、理事長と当時最先端の手術ロボット「ダ・ビンチ」を導入したことや、法人の経営を集約して検討する組織である法人経営室や大学や病院のトラブルを一元的に処理する危機対策室を立ち上げたこと、直近の副町長時には、将来の社会を担う子どもたちの育成のために、子ども園から義務教育終了時まで遠足や修学旅行費用も含めて完全無償化したこと等が印象に残っています。

また、今年の４月から本部で勤務させていただく中で、つくし医療福祉センターの令和４年度決算が創設以来、初めて大幅な赤字決算となったが、これまでの法人が留保してきた資金で補い大事に至らずに済んだとお聞きし、大変驚きました。コロナ化の影響による利用者の減少が大きな要因だと聞いて納得しましたが、法人の運営の厳しさを改めて実感した次第です。コロナ禍による影響は何とかクリアされたのですが、現在進行中の急激な物価高、電気、ガス代などの光熱費や原材料費の高騰や円安、加えて人手不足など社会福祉法人の経営を取り巻く環境は益々厳しくなっているのが現状だと思います。こうした中で、債務超過から法人の倒産という最悪の事態に陥らないように、また利用者の処遇の向上と現場で頑張っておられる職員の皆さんの生活を守るとともに待遇の改善を図っていくために、さらには事業を創設された初代谷本理事長の「社会のためにつくす」という理念を維持発展させていくためにも法人の経営基盤のさらなる強化が必要であります。

もとより微力でありますが、社会福祉法人和歌山つくし会の安定した経営基盤の確立に向けまして、職員の皆様とともに努力してまいりたいと考えておりますので、今後ともご支援ご協力いただきますようお願いいたします。

つくしの里　子ども園

つくしの里こども園　園長
石　倉　芳　美

岩出市職員として市立保育所に４０年間勤務し、令和６年４月よりつくしの里こども園の園長を拝命いたしました。３月末最後の年長児を送り出す際、保護者の方から「この仕事を選んで、そして続けてくれてありがとうございます。」という嬉しいお手紙を頂きました。その言葉を心に刻み、和歌山つくし会に何かしらご縁や運があって導かれたものと感じ、これからの人生の景色が自分らしく豊かなものになるように心機一転努力していく所存でございます。

しかしながら、前職においても所長として運営業務に従事していたものの、経験のない会計事務や文書管理も多くスキル面での大きな壁を感じているのも事実です。今はまだ不安な気持ちもありますが、周りの方々にフォローしてもらいながら学ばせて頂く事に感謝しております。

つくしの里こども園が地域型事業所内保育所として開園し１０年目となる今年度、溝浦前園長が大切にされてきた「安心してあずけられる第二のおうち」を意識しながら子どもたちの「初めての第一歩」を大切に見守りたいと思います。家庭的で温かい雰囲気の中で一人ひとりがすくすくと育つことができるように、職員もたくさんの個性が集まった大家族の一員として力を合わせて日々の保育に全力を注ぎたいと決意しております。

また、事業所や地域の子育て中の保護者の方が安心して就労と子育てを両立できる支援を目指し、お子様の家庭や園での様子や成長過程での喜びや感動、悩みや心配事等どんな些細なことでも伝え合っていけるような、そんな関係を築きたいと思っております。

和歌山つくし会の一員として「つくす」という理念を忘れずに誇りをもち、こども園だけでなく他の施設の方とのコミュニケーションも大切に視野を広げ、関係構築に注力したいと考えております。

「凡事徹底」の姿勢で精進してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

最後に、ある日のままごと遊びの様子をご紹介させていただきます。
Ａちゃん「できたよー、はんぶんこしよ。どうぞ。」
Ｂちゃん「うわぁ、ありがとう。（食べるまね）あーおいし！」
Ａちゃん「はい、ありがとう。」
（分けっこができて、「ありがとう」が言えてえらいね。
これからも、もっともっと心もからだも大きくなあれ！）

つくし医療・福祉センター

「看護主任を拝命して」

つくし医療・福祉センター　看護主任
中　西　敏　之

この度、第２療育棟の看護主任を拝命いたしました。

私は看護師として、この施設で１４年間勤務させていただいております。その経験から重症心身障害児者の看護は、教科書通りにはいかない専門的な知識と技術が必要であるということを知りました。また、利用者とその家族に寄り添い、信頼関係を築きながら、安全で質の高い看護を提供していくことが重要であると考えています。

昨年、更なる知識を得るため、重症心身障害看護師認定で学ばせていただき、資格を習得したことをとても嬉しく思っています。ここで得た知識と技術を磨きながら、利用者とのコミュニケーションを大切にし、個々のニーズに合わせた看護が提供できるよう日々取り組んでいきたいと思っています。

新任の主任で至らない点も多々あると思いますが、他の職員の方々と協力し合い、利用者があかるく・あたたかく・あんしん（３A）に過ごせるよう努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

「看護主任を拝命して」

つくし医療・福祉センター　看護主任
山　田　優　子

この度、第１療育棟でショートステイの看護主任を拝命いたしました。

私は、つくし医療福祉センターに入職し８年が過ぎました。その間、ショートステイの担当を７年間させていただいております。７年の間に重症心身障害児（者）を自宅で介護されているご家族の負担の重さを知りました。子どもさんがいつ急変するかもしれないという不安、親御さんが歳を重ねることへの今後の不安や負担等を支援する中で痛感しています。そんな中で、少しでも利用者様、ご家族様の不安や負担を軽減することが出来たらという思いで看護に携わっています。また、利用者様ご家族様の立場に立った看護、ご家族様とのコミュニケーションを大切にし、気軽に不安や愚痴を話せるような関係づくりをしたいと思っています。

５月に某重症心身障害者施設のショートステイを見学してきました。その施設ではショートステイ利用後にアンケート調査を実施し、利用者様の利用満足度を確認していました。

当ショートステイでもアンケート調査を実施すれば、利用者様の満足度を確認でき、アンケートにより今後の課題も見えてくると思います。その上で要望や意見に真摯に向き合い、より良いショートステイを目指して行きたいと思っています。

「育成主任を拝命して」

つくし医療・福祉センター　育成主任
尾　上　真　一

この度、育成主任を拝命しました尾上真一と申します。
私がつくし医療・福祉センターに勤め始めてから７年と少しが経過しました。
つくしで勤務する前は特養・デイケアの高齢者関係の施設で１０年程働き、障がい者施設で働くのはこちらが始めての経験でした。
障がい児・者への介護はこれまでの介護技術とは異なる点も多く、新しい経験の連続でした。特に利用者様たちとのコミュニケーションに苦労することが多かったかと思います。
時間はかかりましたが、利用者様のことを理解していくことでコミュニケーションをとることができ、信頼関係を少し築くことができたかと思います。
介護技術、利用者様との関係性、業務など様々な場面で上司や先輩方に支えられ、ここまで成長させていただくことができました。
これからもたくさん学ぶことがありますが、一つひとつ身につけ自分自身を高め、つくしで働くスタッフの皆様とよい環境づくりが出来るよう、利用者様に、そして一緒に活動をするスタッフにも『楽しい』『嬉しい』と感じてもらえるような機会を増やすことができればと考えています。
まだまだ未熟者ではございますが、これからも皆様のご指導、ご鞭撻、ご協力をよろしくお願いいたします。

「ご挨拶」

つくし医療・福祉センター　理学療法士
森　井　海　貴

今年の４月つくし医療福祉センターに理学療法士（以下：ＰＴ）として新卒で入職しました。
私が就職した重症心身障害児者を対象とした医療型障害児入所施設はＰＴにとっては少しマニアックな領域であると思っています。多くのＰＴは日常生活への復帰を目標とした高齢者の整形疾患、脳血管障害、代謝疾患などにアプローチすることが多い現状です。
私がつくし医療福祉センターに就職を決めたのは、学生時代行った実習先の施設でＰＴの役割を知ったことがきっかけになっています。特に印象に残っているのはてんかん発作を合併したアテトーゼ型脳性麻痺の方です。発作により背中の反り返りが著明にみられ、それが側弯を助長していると考えられていました。私は投薬するしかないと思い、ＰＴができることはないと諦めていました。しかし、担当の先生はその方の楽な姿勢に近づけるように腰背部の緊張を緩めてリラックスさせることで発作が落ち着き、結果的に側弯進行予防に繋がっていました。
その経験から徒手的に様々な方を少しでも楽にさせてあげることができるかもしれないと思い、この世界に飛び込みました。
未熟者でご迷惑をおかけしますが、ぜひ見かけた際にはお声がけくださると幸いです。

つくし幼保園

「憧れの保育教諭」

つくし幼保園　保育教諭
庄門　梓

和歌山つくし会つくし幼保園に入職させていただき、約１か月経ちました。ずっと憧れていた保育教諭として働くことができ、大きな喜びを感じているとともに、和歌山つくし会の職員の一員として気が引き締まる思いです。毎日子どもたちとたくさん関わる中で、新たな発見と学びがあり、子どもたちの笑顔に元気をもらいながら充実した日々を過ごすことができています。そして、どんな時も優しく丁寧にご指導くださり、見守ってくださる先生方が側に居てくださるので、安心して何事にも全力で取り組むことができています。

私はとても未熟で保護者の方々や子どもたち、先生方にご迷惑をおかけしてしまうこともありますが、それでも見捨てずご理解とご協力いただいておりますことに、本当に感謝申し上げます。そして今後ともよろしくお願い致します。

私は、これから和歌山つくし会の一員として、「つくす」という精神を常に持ち、子どもたちの最善の利益のため、何事もあきらめずに全力で努力を重ねてまいりたいと思っております。そして、子どもたちの姿や状況、背後にある文脈などに目を向けることを大切にし、その状況に即した援助を探求し続けていきたいと思います。

「憧れの職業」

つくし幼保園　保育教諭
辻　璃子

短期大学を卒業し、つくし幼保園でお世話になり始めた当初の私は、憧れの職業に就くことへの期待の気持ちと、社会にでることへの不安の気持ちの両方を抱えていました。

しかし、そんな私を温かく迎えてくださり、丁寧に指導してくださる先輩の先生方のおかげで、安心して新しい環境にも慣れることができました。

初めてのことや不慣れなことが続き、目の前の出来事に手一杯で、私も先輩の先生方のようになれるのだろうかと不安を感じることや、子どもたちと関わる中で自分の未熟さを痛感し、落ち込むこともありますが、優しく声をかけてくださる先生方や、子どもたちの笑顔に励まされ、毎日楽しく保育することができています。

また、保育の中で日々成長していく子どもたちの姿に感動し、やりがいのある素晴らしい職業に就けたことを、改めて嬉しく思います。

まだまだ至らないところが多く、先生方や保護者の方々に迷惑をかけてしまうこともありますが、私を保育者として日々成長させてくださる先生方や保護者の方々、そして子どもたちに感謝し、子どもたち一人ひとりを我が子同然に思い、愛情いっぱいに接する先輩の先生方のような保育者になれるよう精一杯頑張っていきたいと思います。

和　歌　山　乳　児　院

「無償の愛を伝えていく」

和歌山乳児院　保育士
吉　田　裕加里

高校生の頃、虐待で子どもが亡くなるケースが増えているというニュースを見て「助けたい！！！」と思ったことがきっかけで養護の世界を知りました。そして専門学校卒業後、計４年間児童養護施設で働かせていただきました。

日々幼児から高校生までの子どもたちと過ごす中で、幼児期の関わりが大きくなってからの子どもたちに大きく影響すると感じました。自分の幼少期を振り返ってみても「あっ、こうやって関わってきてもらったから今の私はこうなのだ」と考えさせられることがあります。そんな大切な幼児期の関わりを深くできる場はどこだろうと考えた時に、乳児院から来る子どもがいたこともあり、乳児院に興味を持ち現在に至ります。

仕事をする上で“無償の愛を伝えていく”ことを心掛けています。当初の「助けたい」という想いは今考えればおこがましい話ですが、子どもたちの心が少しでも満たされ、愛されてもいいのだと思ってもらえるように、愛着形成の基盤作りをしていくことが、乳児院という場の大きな役割だとより感じています。

経験もそうですが、様々な分野の知識も学んでいき、一手一つに助け合って励んでいきたいです。

「ご挨拶」

和歌山乳児院　保育士
鍛　冶　幸　美

和歌山乳児院に勤めて８年になります。

保育園と大きく違う所は、乳児院は子どもたちにとって“お家である”という事でした。その違いに最初は戸惑う事もありました。しかし、その分子どもとの距離が近く少しでも安心して思いを伝えられる存在と居場所になりたいと思うようになりました。

研修で何度も学んだ「子どもの望んだことを望んだように」を常に頭に入れて、一人ひとりの思いに耳を傾けて寄り添う事を大切にしていきたいです。

そして、初心を忘れず「感謝」「謙虚」「素直」な気持ちをモットーに子どもたちと笑って過ごせるよう努めていきたいと思います。

まだまだ至らない所ばかりですが、ご指導とご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

「ご挨拶」

和歌山乳児院　保育士
的　場　公　美

私は、特別養護老人ホームに勤めていましたが、子どもと関わる仕事につきたく乳児院の求人を見つけ応募しました。

乳児院で生活している子どもたちはいろんな環境から来た子たちがいることもあり、最初は戸惑うこともありました。慣れるまでいろんな対応を教えてもらったり、自分で考えたりして子どもたちと関わってきました。子どもたち個人個人違い、その子その子に合わせた接し方や言葉がけなど、子どもたちに合わせた関わりかたをしていくことがとても大切です。子どもたちは可愛いです。

乳児院の仕事は子どもたちと関わることができるので毎日楽しく過ごすことができ、やりがいのある仕事です。

何人もの子どもたちが巣立って行き、どんなに成長したかなと思う事もあるなかで、乳児院を退所した子どもたちが遊びに来た時の成長をみることも楽しみの一つです。よく喋れるようになって、こんなこともできるようになったよ、と声を掛けてくれると大きくなったと感激することもあります。

これからも乳児院で楽しく子どもたちと生活できるように関わり、子どもたちが絵本を読んだりスプーンを使えるようになったりボール遊びをしたり、いろんな出来ることを増やせるように関わっていきたいと思います。

これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

里親支援センター「なでしこ」

「何もかもが！初めて！！」

里親支援センター「なでしこ」 主任相談支援員
川　口　由　佳

２０２４年４月より、里親支援センター「なでしこ」は第２種社会福祉事業の認可を受け、和歌山つくし会の６番目の施設として業務を行うことになりました。
それに伴い職員数も支援員３人体制から、センター長はじめ、里親リクルーター１名、里親トレーナー１名、心理療法士（常勤１名、非常勤１名）、自立支援担当１名、里親支援員３名の９人体制となりました。
また、業務内容が和歌山県中央児童相談所に成り代わって担うことも増え、里親、各関係機関（行政、医療、教育など）とのより一層の連携、情報共有が求められるようになりました。
令和４年度まで所属しておりましたつくし医療・福祉センター地域連携室での学びやスキルを活かし、社会的養護の子どもの気持ちを大切に、子ども自身がなりたいというビジョンを描き、自分で人生の舵をとれるようなチーム体制でサポートする支援を目指していきたいと思います。
そして、このような大事な始まりに主任に任命いただき、責任の重大さを痛感しております。期待に応えられるよう、日々精進してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

「ご挨拶」

里親支援センター「なでしこ」 心理療法士
生　駒　慎　一

３月に大学院を修了し、この度ご縁がありまして、４月から里親支援センター「なでしこ」でお世話になっております。
長らく学校教育の世界で勤めてきた私にとって、福祉の世界で働くのは初めての経験です。
しかも、心理職としては未熟な一年生。
自分で望んだ道とはいえ、「私に務まるのだろうか」と、とても不安な気持ちを抱えたままのスタートでした。
幸いなことに、センター長をはじめ、同僚の皆様方に支えていただき、新入職員である私に何事にも熱心に、丁寧に教えてくださるおかげで、ここまでやってこられたと思います。また、「なでしこ」における仕事を通して今までの人生で見えていなかったことに気付いたり、物事を考える新たな視点が加わったりしています。
日々の発見の連続で、私の視界に新しい景色を見せてくれていると感じます。
さらに、訪問先で出会う里親の皆様方のお話を聞いていると、その熱い思いや強い願いがひしひしと伝わってきて、心を動かされます。子どもたちと関わったり様子を観察したりしていると、その元気さと秘めたパワーに活力をもらいます。
心理職としてはまだまだ至らない点も多いかと思いますが、いろんなところで出会ういろんな方々と、ともに悩んだり、ともに考えたりしながら、自らも成長していけるような仕事ができるように、今後も踏ん張ってまいりたいと思います。

つくしっ子連載

連載 第１回　里親支援センター「なでしこ」

第２種社会福祉事業 里親支援センターへの道のり

社会福祉法人 和歌山つくし会　常務理事

森　下　宣　明

創生期

平成２２年３月、和歌山県が実施した「ふるさと雇用再生特別基金活動事業」のプロポーザルに、里親支援センター「なでしこ」として応募しようと思ったのは何故だったのか、長い年月の記憶を少しずつ辿ってみたいと思います。

当時、アメリカやオーストラリアでは既に多くのこどもたちが里親家庭で養育されていましたが、それに比べると日本で里親家庭に措置されていたこどもたちは、まだわずかでした。

私たち夫婦もその前年に１歳のこどもを委託されたほやほやの里親で、「困った時に相談できる所があれば良いのに」と思っていたこともあり、当時の子ども未来課の担当者の先見性と、全国里親会の副会長をされていた元会長の熱意にほだされたことから、プロポーザルに応募することとしました。

プロポーザルに応募するためには準備が必要です。基本コンセプトは、新規に職員を雇用するということでしたので、里親支援センターの業務の中心となる人材として、社会福祉士の資格を取得した元乳児院の職員にあたってみたところ、快く引き受けてくれました。

次に、この事業の必要性をプロポーザルの審査員に訴える資料の作成に取り掛かりました。これには、里親会元会長に随分助けられました。

こうして、万全の体制でプロポーザルに臨み、無事、選定されることができました。

しかし、そこからが大変でした。

当時は、里親会事務局も児童相談所が担っていて、里親支援センター「なでしこ」ができたからといって、里親の名簿を頂けるわけでもなく、どこに里親がいるかわからない状態でした。そこで、再びお世話になったのは里親会元会長でした。里親の集まりがあるときに声をかけていただいて、まず集まりに参加された里親との関係性の構築に努めました。

そして、１年後には、独自に里親名簿の作成に漕ぎつけました。

「ふるさと雇用再生特別基金活用事業」の補助金は平成２１年度から３年間のものでした。

里親支援センター「なでしこ」のプロポーザルはその２年目からでしたので、実質２年で終了しなければならないと思っていましたが、３年目からは国の補助事業である「里親支援機関事業」に移行することができ、引き続き事業を継続することができました。

平成２４年４月、「里親支援機関事業」として、里親支援センター「なでしこ」は、新たな１歩を踏み出しました。その際、児童相談所から里親会事務局の業務も移管され、里親会との関係はより一層深くなりました。

しかし、里親名簿は相変わらず個人情報保護法の理由で児童相談所からはいただけませんでした。しかし、今回は里親会の名簿を作成するという方法があり、すぐに作成することができました。但し、里親会に加入していない里親は相変わらずわからないままでした。

少し長くなりましたので、今回はここまでといたします。

次回の「第２種社会福祉事業 里親支援センターへの道のり」は「里親支援機関事業の１２年間の道のりについて、当時を振り返り回想したく思います。

連載 第６回

「イタリアで見つけた共生社会のヒント」

つくし医療・福祉センター　リハビリテーション課　課長

川　野　琢　也

本連載も６回目を迎えることになりました。今までイタリアのインクルーシブ教育や社会についてのポジティブな側面について記してきました。今回は趣向を変えて訪問時に感じたネガティブな側面について記してみようと思います。

イタリアに派遣される前に日本での研修が２期に分けて計６日間ありました。研修はオランダ団（高齢者分野）、フィンランド団（青少年分野）、イタリア団（障害者分野）の３団合同で開催されました。内容は「地域コアリーダープログラム」の目的や団員の心構えの確認、団テーマや個人テーマの設定、派遣までの自己学習について、そして派遣国に関する注意事項などのオリエンテーションです。注意事項では、私たちイタリア団に対して「パスポートは肌身離さずに持って！」「とにかくスリには注意して！」と犯罪に巻き込まれないようにと出発前にかなり脅されました。オランダ団やフィンランド団にはそのような注意はなかったので、イタリアはよっぽど危ない国なんだと心構えしました。歴史あるイタリアは世界遺産も多く、観光客狙いのスリが多発しているとのことでした。それを実感した出来事を以下に記します。イタリア派遣のプログラムでローマにある在イタリア日本国大使館へ表敬訪問させていただく機会がありました（写真①在イタリア日本国大使館）。訪問は月曜日の朝一番のスケジュールで、予定より少し早く到着した私たちは大使館前で２人の日本人に会いました。話しを聞くと２人ともスリに財布をすられパスポートもなくなったので再発行の申請に来て、大使館の開館を待っている状況でした。その他にも一緒に行った団員が書店で本を読んでいると不自然なほど隣に立ってくる人がいたり、ある時にはスーツケースを押している最中に知らない人が押してきたりした場面もありました。幸いにも今回のイタリア派遣では団員が犯罪に巻き込まれることはありませんでしたが、インクルージョンや共生社会を学びに行っている派遣国の治安の悪さはどこか矛盾しているように感じました。

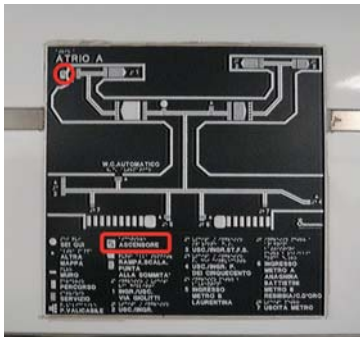
次に、環境面について記したいと思います。ローマではテルミニ駅近くのホテルに宿泊していました。テルミニ駅は日本でいう東京駅のような存在で、イタリアの玄関口でもありヨーロッパでも最大級の駅です。イタリア国内のみならずヨーロッパ各地への高速鉄道が出ていたり、大きなバスターミナルも併設されています。そんな主要駅ですが、かなりのメインとなる地下道から地上に出るにあたってエレベーターが敷設されていませんでした。計画段階では敷設する予定だったみたいで、案内板にはエレベーターが示されていました（写真②地下道の案内板）。実際に行ってみるとそこには敷設するであろう空間は確保されていましたが、厚い扉で閉ざされていました（写真③地下のエレベーター敷設予定場所）。地上には鉄柵で仕切られた鉄板が敷かれた四角いエリアがあり、工事は終了し地上と地下はつながっていることがうかがえました（写真④

地上のエレベーター敷設予定場所）。このエリアのアクセスは階段のみで、車いすユーザーやベビーカー、大きな荷物を持っている観光客などは非常に困ることになります。ここは先ほど記したように国を代表とする主要駅からの連絡口で、このようなアクセシビリティの不便さは日本では考えられないことだと思いました。

さらに早朝のテルミニ駅周辺を散策すると、多くのホームレスの方々が駅に面した大通りのアーケード下で寝ていました（写真⑤早朝のテルミニ駅周辺）。写真⑤のQRコードのGoogleストリートビューでも右奥に少し移動すると確認できます。日本の都市部の駅にも同じような光景はみられるかもしれませんが、メインストリートのすぐ隣で寝泊まりしている現状に驚きました。

世界的に見ても珍しい１９７０年代からのフルインクルーシブ教育によってインクルージョンな社会が築かれているイタリアでも、多くの民族や文化が交わり、歴史もあるが故の難しさや、また財政面での課題も感じられました。障害のみならず宗教や文化、ジェンダーなどさまざまな人々が共に暮らしているからこそ、お互いの価値観や多様性を認めあうことにもつながるのかなぁ…と考えさせられました。

写 真 ①



写 真 ②

写 真 ③

写 真 ④

写 真 ⑤

つくしっ子ニュース！！

満開の桜の中、広瀬幼保園に２２人の新しいおともだち！

（令和６年４月５日）

広瀬幼保園では４月５日に、谷本理事長出席のもと令和６年度入園式が執り行われました。

菫組（３歳児クラス）に７名、土筆１組（１歳児クラス）に７名、土筆０組（０歳児クラス）に８名のお友達が新しく入園されました。

園の前の岡公園の満開の桜が、２２名の園児とその保護者に「おめでとう！」とお祝いの言葉をかけてくれているようでした。

入園式の後の保育教諭によるお祝いの「大型絵本」と「パネルシアター」の催し物で、園全体が笑顔でいっぱいとなりました。

みんな毎日元気に登園してね！

菫組

土筆０組

土筆１組

つくしっ子ニュース！！

つくし幼保園で「おさかな教室」開催

つくし幼保園　保育教諭
土　橋　仁　美

魚を食べたことがあっても実際に捌くところを見たり触ったりする経験の少ない子どもたちのために、フーズファイル（業者）を講師に招いて“おさかな教室”を行いました。

２歳～５歳の子どもたちが、海老や鯛、太刀魚などを実際に見た後、３歳以上児は、魚を触ったり鯛を捌くところを見学しました。

私たちは「子どもたちが触るのを怖がるのでは？」と思っていたのですが、講師から「お魚を触ってもいいよ、どうぞ！」と言われると、我先に魚の口の中を覗き込んでは「歯がある～」と歯に触れたり、目や体を触っては「目、ぷにゅぷにゅしてる！」、「体、つるつるしてるな～」など、感じたことを言葉にしながら面白そうに触っていました。そして、講師が鯛を捌きにかかり鱗が飛んでくると、拾っては大事そうにポケットに入れる子どもや、内臓を見て「どうして緑色なんだろう？」と不思議そうに眺めている子どもがいました。

三枚から切り身となった鯛は、調理場で焼いてもらい、給食で食べることができ、「おいしいね」「もっとたべたいね」と会話しながら嬉しそうに食べていました。

今回の「おさかな教室」は、食育だけでなく遊びの中で魚のことを話題にしたり絵に描いたりなどにも発展していて、貴重な経験ができたのではと思っています。

つくしっ子ニュース！！

つくしの里　子ども園ギャラリー

シャボン玉　こいのぼり　避難訓練　バンビーニ広場　園外保育

こいのぼり

シャボンあそび

バンビーニ広場にお散歩

避難訓練

編集後記

７月発刊の予定だった「つくしジャーナル第９号」ですが、自称編集長の谷本が膝人工関節の手術の為に１カ月ほど入院したため、９月の発刊となってしまいました。大変お待たせいたしました。

入院中に悶絶、激痛のリハビリに耐えながら、リハビリテーションの大切さを生まれて初めて実感しました。手術直後に全く曲がらなかった膝が２週間で９０度、退院するころには１２０度近くも曲がるようになりました。

また、入院中は職場の皆さまに大変ご迷惑をおかけしましたが、皆さまからあたたかい励ましのお言葉、見守り、ご理解をいただきました。本当にありがとうございました。

つくしジャーナル自称編集長　谷本